

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第八章 曆と文字

地球は自転し、そしてまた公転している。そのため、日夜が繰り返され、季節が巡ってくる。曆は、そうした自然現象を帰納して生まれたものである。周期性があるのは当然である。ところが、繰り返して起こるといふ周期性とともに、時は線状に流れ、取り返しのない性質があるといふことも人は知っている。

メソアメリカで最初の曆が見つかったのは、モンテ・アルバンという、オアハカにある遺跡であり、曆を記す習慣は、紀元前五〇〇年頃から始まったとされている。そこにある曆は、二六〇日曆と三六五日曆の組み合わせだった、カレンダー・ラウンドと呼ばれる曆である。これは、二六〇日と三六五日で繰り返される曆を組み合わせたものである。それゆえ、二つの最小公倍数である一八、九八〇日で繰り返す曆ができる。

長期曆

ところが、紀元前後には、長期曆という曆が使われるようになる。これはある日を曆の初めの日と決め、そこから日を数える曆であるので、ちょうど西曆と同じような仕組みの曆とみてよい。曆元の日から数え、繰り返すことがないので、時が線状に流れていくその性質を捉えた

第八章 曆と文字

13. 0. 0. 0. 0	4アハウ	8 クムク	3114B.C. 8/11 (マヤ曆元の日)
7.16. 3. 2.13	6ベン	16シュル	36B.C.12/6 (チアパ・デ・コルソ石碑2)
7.16. 6.16.18	6エツナツプ	1ウォ	32B.C. 9/1 (トレス・サボテス石碑C)
7.19.15. 7.12?	12エブ	0ケフ	37A.D. 3/2 (エル・パウル石碑1)
8. 2. 2.10. 5	7チクチャン	18ウォ	83A.D. 8/21 (アバフ・タカリック石碑5)
8. 4. 5.17.11	7チュエン	14カヤツプ	126A.D. 6/3 (アバフ・タカリック石碑5)
8. 5. 3. 3. 5	13チクチャン	3カヤツプ	143A.D. 5/19 (ラ・モハーラ石碑1)
8. 5.16. 9. 7	5マニック	15ポーブ	156A.D. 7/11 (ラ・モハーラ石碑1)
8. 6. 2. 4.17	8カーバン	0カンキン	162A.D. 3/12 (トゥシュトラの小像)

表10 マヤ最初の石碑(ティカル29号)以前の石碑にみられる日付

曆とみることが出来る。それが西曆より少し早くメソアメリカで発生したのである。これは人類の曆の歴史からみても、特筆すべき出来事である。

マヤの曆元の日と、西曆前後に現われた長期曆を記すと、表10のようになる。すべてマヤ曆の読み方にし、西曆はグレゴリウス曆に換算してある。

それぞれの石碑の出所場所をみればわかるように、それらはマヤ地域の外、ベラクルス州からテワンテペック地峡を通り、グアテマラ太平洋岸に至る地域のものである。

この沿岸地帯と呼んでいる地域のメキシコ湾岸側では、メソアメリカ最初の文明といわれるオルメカ文明が発生した。紀元前十二世紀頃から、サン・ロレンソを中心に文明が頂点に達し始めたらしく、以後沿岸地帯は、メソアメリカ

の先進地域となったが、西暦の暦元の少し前に、長期暦という、周期性を越えた暦を生み出したのである。

この暦は、時の線状性を測る部分と、周期性を取り入れた部分の二つをうまく組み合わせできている。ちょうど西暦が、年という繰り返しのない部分と、月日という周期的に繰り返されている部分からできているのと同じような仕組みなのである。とはいえ、西暦とは単位となるものが異なる。五つの単位があるが、それらは第一章でも触れたように、次のような関係になる。

一 バクトウン Ⅱ 二〇カトウン
一 カトウン Ⅱ 二〇トウン
一 トウン Ⅱ 一八ウイナル
一 ウイナル Ⅱ 二〇キン Ⅱ 一日

それぞれの単位は二〇ごとに位があがるので、二十進法で数えられていることがわかる。ただ三番目の位だけが二十進法に従っていない。これはおそらく一年の長さに近い数を選んだためと思われる。二十進法の体系に則ったこの部分は、西暦でいうと年数に当たるといってよいかもしれない。

最初は点と棒を使い、位置の違いでもって、この部分は表わされていた。一は点で、五は棒で表わされていた。ところが、その曆の体系がマヤにもたらされると、それぞれの位を表わす文字、すなわちそれぞれの期間を表わす文字が生み出される。これまで見つかっているマヤで最初の曆表記は、ティカルの石碑二九号に記されている。それは、八・一二・一四・八・一五であり、西曆に直すと二九二年七月六日となる。さらに古い日付をもつ石碑が見つかる可能性は大であるが、現存の資料では、トゥシュトラの小像の記した一六二年から、ティカルの石碑二九号の二九二年までの間に、長期曆はマヤにもたらされ、マヤ人はそれに期間の文字を付け加えたことができる。

年を表わす部分がわかると、月日を表わす部分は一義的に決まる。年といったが、実際には日の数であるためである。これは西曆と大きく違うところであり、わかりやすくするため、西曆の年に当たると述べたにすぎない。月日を表わす部分は、第一章でも少し触れたように、二六〇日曆と三六五日曆でもって表わされる。二六〇日曆は、二〇の「日」と一三の数が組み合わさってできる曆であり、三六五日曆は二〇日が一単位の「月」が一八に、不吉な日と呼ばれる五日が付け加えられてできる曆である。

八・一二・一四・八・一五である、二六〇日曆の一三メン、三六五日曆の三シップとなり、九・〇・〇・〇・〇である、二六〇日曆では八アハウ、三六五日曆では一三ケフの日となる。古典期で最初の日と最後の日に加え、区切りのいい日を記しておこう。

八・一二・一四・八・一五 一三メン 三シツプ 一九二二年七月六日(テイカル石碑二

九)

九・〇・〇・〇・〇 八アハウ 一三ケフ 四三五年十二月九日

九・五・〇・〇・〇 一アハウ 一八セツク 五三四年七月三日

九・一〇・〇・〇・〇 一アハウ 八カヤツプ 六三三年一月二十五日

九・一五・〇・〇・〇 四アハウ 一三ヤシュ 七三一年八月二十日

一〇・〇・〇・〇・〇 七アハウ 一八シツプ 八三〇年三月十三日

一〇・四・〇・〇・〇 一二アハウ 三ウオ 九〇九年一月十八日(トニナの記念

碑一〇一号)

一一・一六・〇・〇・〇 一三アハウ 八シユル 一五三九年十一月十二日(マヤ暦と

西暦の変換基準となつた日)

一三・〇・〇・〇・〇 四アハウ 三カンキン 二〇一二年十二月二十一日(大周期

の終わりの日)

暦の省略法

マヤ人はこの長期暦なるものを九〇九年まで使用し続けたのであるが、いかにも長たらしい。我々は五〇年一月三日のごとく、一九〇〇を省いていったりするように、マヤ人も省略して、

曆を表記した。この省略法が多用されるのは、碑文が長くなる古典期後期にはいつてからであるが、それは早くも四世紀にはみられる。

曆の省略法は、いくつか異なる周期の曆をマヤ人は使っていたため、それらのいくつかを組み合わせることで行なわれていた。第一、長期曆自体が、冗長である。バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンという五つの期間を使って表わされる部分は、曆元からの日数であり、それだけである日を指定できる。それで十分なのに、それに加えて、その日は二六〇日曆では何の日にあたり、三六五日曆では何の日になるといふ具合に、重複していつているのである。言語の特徴を述べたところで、二重性、冗長性が、中米の一つの特徴といったが、こんなところにも、冗長性が認められる。

カレンダー・ラウンドだけの表記であると、一八、九八〇日、五十二年あまりの間では正確であるが、それがいつの時代なのかは示すことができない。しかし一度長期曆でもって最初に時を記しておけば、後はカレンダー・ラウンドだけでも十分である。その基準となる日から、何日前とか何日後の日とすればよいのである。というわけで、最初に長期曆が現われるため、イニシャル・シリーズということもある。

イニシャル・シリーズは、ふつう長期曆のほか、夜の九王の情報や月の情報などが付け加えられる。夜の九王の情報は、最初の石碑であるティカルの石碑二九号では、生起するはずのその部分が損傷を受けているのでわからないが、二番目の日付をもつライデン板では、すでにみ

られるので、おそらく最初から記されていた可能性が高い。これは夜または冥界を支配する九つの神を表わすと考えられているが、九日で一周期の暦とみてよい。これとカレンダー・ラウンドの組み合わせを考えると、九×一八、九八〇日ごとには、同じ組み合わせは生じない。九×一八、九八〇＝一・三・一四・九・〇であり、およそ四六八年ごとには同じ組み合わせの日は生じない。四世紀には、もうこの表記によって日付が示されている例が見つかるが、この表記法は、後期になって、ウスマシクタ川流域で好まれた。

カレンダー・ラウンドと期間の終わりを利用した方法はよくみられる。トゥンの終わりとカレンダー・ラウンドの組み合わせであると、三六〇と二六〇と三六五の最小公倍数の日ごとには、同じ日は巡ってこない。二・七・九・〇・〇ごと、日に直すと三四一、六四〇日、年に直すと九三六年ごとには同じ組み合わせの日は巡ってこないのである。たとえば、「八アハウ 一三ケフ、トゥンの終わり」とあれば、九・〇・〇・〇・〇 八アハウ 一三ケフと決まってしまう。それ以外は古典期を越えてしまうからである。

こうした日付の指定は何のために行なわれていたのであろうか。その第一の役目は、王たちの誕生、即位、死などの歴史を記すことであった。碑文の主要内容は、歴史である。しかし、文字は、そればかりでなく、神々の体系とか日常の吉凶などの占いのためにも使われていた。その多くは後古典期の作といわれる絵文書に負っているが、古典期にも、神々や儀式の記録は、ヤシュチランの碑文やパレンケの碑文などにみられ、そしてまた土器に描かれた文字から、確

かにあつたといふことができる。

文字

マヤ文字の解読の最初の時期は、曆の文字に集中した。そのお蔭で、曆の仕組みや読み順が判明した。マヤ文字の読み順は大変かわっており、二列を対にして、左・右、左・右と上から下に読んでいく。このような読み順がどうしてできたのか不思議であるが、歴史をおつて石碑をみると、納得できる。

最初の資料は、西曆二九二二年に相当する日付を刻むティカルの石碑二九号である。曆の文字が縦一列に書かれているが、途中から碑は破損しており、下部は消失して不明である。二番目の資料は翡翠に彫られたもので、ライデンにあるところから、ライデン板といわれている（三二〇年）。これをみると、曆の大切な部分は大きく縦一列になっているが、下のほうは二列になっている。一つの文字の大きさを二つのますに分けたわけである。この部分をどのような順で書いたらいいのか、おそらくマヤ人は悩んだに違いないが、左・右と読むのがいちばん理に適っていることから、そのように書き順を決めたものと思われる。三番目はワシヤクトゥンの石碑九号（三二八年）、四番目に古いのは、同じくワシヤクトゥンの石碑一八、一九号である（三五七年）。いずれも最初に曆の導入文字が二ます分の大ききで書かれている。その下に二列に文字が書かれているところから、ライデン板と同じように、一つの文字の大きさを二つに分

けたことで、その二つ分を読む必要上、左・右と読んでいったと推定できる。これで不思議な読み方の成り立ちが推定できたのであるが、この読み方は十五世紀頃の作といわれる『マドリッド絵文書』にまで引き続いて用いられた。

マヤ文字の主内容は、王朝の歴史といったが、月や金星の動きも記していた。月の情報は、多くの石碑で、イニシャル・シリーズのすぐ後に記されている。『ドレスデン絵文書』にも月の情報が記されている。金星も石碑に記されているが、金星については、『ドレスデン絵文書』が詳しい。

こうした天体の動きに関心があったのは、天文学的な関心からではなく、占星術的な関心からであった。それはこれらの天体の動きと、二六〇日曆や三六五日曆を組み合わせて記述していることからわかる。天体が人間の運命に影響を及ぼすという考えは、洋の東西を問わないものである。

こうしたことを記録した文字とはどのようなものであったか。まだ十分に解読できてはいないが、文字の性格は、徐々に明らかになっている。

文字の材料

マヤ文字の資料は、大きく分けると、彫り刻んだものと、描いたものに分けられる。前者に属するのは、石に彫られた碑文の他、木や骨や貴石に彫られた文字が入り、後者は、土器や壁

画にみられる文字と絵文書の文字である。彫り刻んだものと、描いたものは、文字を記すための道具や素材が違つたためか、書体が異なる。彫り刻んだほうが概して複雑であり、聖刻文字 (Hieroglyphs) とさうにふさわしい。

碑文を記す材料は、マヤ文明が展開した石灰岩質のペテン地方に豊富にある石灰岩であるが、一部で砂岩や凝灰岩が使われている。文字を記すための道具は、火打石 (チャート) の鑿で、細部はおそらく黒曜石を使って仕上げたものと思われる。石に石で刻んだわけであるが、石灰岩というのは取り出したときは柔らかく、徐々に固くなるそうで、文字は刻みやすい。しかし刻みやすかつた分、風化しやすく、残念なことに、ペテンで発見された石碑には、細部が識別し難く、読みにくいものがたくさんある。いっぽう凝灰岩は最初から固く、文字を刻むのに苦勞したことであろうが、その分、文字はよく残っている。

石碑は遺跡の近くの石切り場から切り取られ、遺跡の中心部まで運ばれ、適当な位置に立てられたのち、文字が刻まれたと推定されている。文字は、最初線を引き、大体のますめをこしらえてから、切り刻まれた。線が引かれたあと、途中まで文字が刻まれたものや、線だけ引かれたものが発見されているからである。そうした線や文字の大きさをみると、線は直線ではないし、それぞれのますの大きさが異なるので、定規で引かれたとは思えない。それらはみない加減であり、マヤ人は物差しで、きちつと物事を計つて記録するなど思いもよらなかつたと思えない。その一方で、ほとんどまちがうことなく時を計つているのであるから、何

ともアンバランスな感じがしてならない。

では、土器や壁画の文字はなにで書いたのか。直接証拠となる遺物はないけれども、ティカルで出土した骨には、筆を持つている美しい手が描かれているし、文字の柔らかさからみて、筆が用いられたことはまちがいないであろう。

絵文書は、いちじくの木繊維からこしらえられた紙を石灰でコーティングして、その上に書いたものである。文字の色は、土器や壁画と同じく、黒である。絵文書の文字は細く、小さく、しかも硬い感じがする。そのため、おそらく筆ではなく、先が若干平たいものと先の尖った二種類の竹ペンのような硬いもので描かれたものと思われる。

文字の構成

文字というのは、文字素からなる。文字素は主字と接字にわけることができる。つまり文字とは、接字と主字がくつつきあって、ほぼ四角な文字ますにはいつているものを指す。接字と主字というのは、大きさから分けた名称に過ぎず、文字ますを占める部分が大きい文字素を主字といい、それについて生起しているように思われる小さな文字素を接字という。このように定義すると、マヤ文字は定義できると思うのであるが、では文字という単位は言語のどの部分に対応することになるのだろうか。それがわかると、マヤ文字の性格を述べることができるのであるが、実はまだよくわかっていない。しかし、それでもいくつか、文字の性格を述べるこ

とができる。

文字まずにはいつているもの、すなわち、他と視覚的に区別できる固まりをなしているものを文字と定義したのであるが、それはだいたい漢字一字または漢字に送り仮名のついたものに対応するとみてよいであろう。ところが、文字まずには、前置詞とみられる文字素まで一緒にはいって、一つの固まりを形成する場合がみられる。そうすると、マヤ文字は、表語文字に加え、表句文字もあるという見方をしなくてはならない。一つの固まりが、言語の句に対応する場があるからである。

一九六二年『マヤ文字のカタログ』が出版された。そこでは、主文字の総数が一二、四二五と数えられている。主字が三五六、接字は三七〇、頭字が八八登録されている。それから約三十年の間に新しい碑がたくさん発見された。それゆえ、その数より多いことは確かであるが、誰もまだ正確にマヤ文字の総数をいうことができない。私はおよそ五万字ほどで、そのうちの約三分の一が曆に関する文字で、残りが歴史や儀式を記した文字と考えている。そして主字と接字はあわせて千ほどあるのではないかと推定している。

幾何体と頭字体

多くのマヤ文字には幾何体と頭字体がある。頭字体は人や動物の頭をかたどったものである。幾何体のほうは、何を表わしているのかよくわからない幾何的な模様の文字である。両者は同

価であるが、その関係は図15のようになる。

2は、幾何体の弁別要素を頭字のなかに持っている。1は、両者の関係が一見しただけではわからないもので、生起場所の比較から、両者が同価のものとなったものである。3は、幾何体の一部をかえて、頭字体にしたものである。

このほかマヤ文字の複雑さの極致ともいえる全身像で描いた、全身体とでも名づけられるものがある。これはおもに暦の文字に用いられており、少しくらいわからなくても、前後の日付

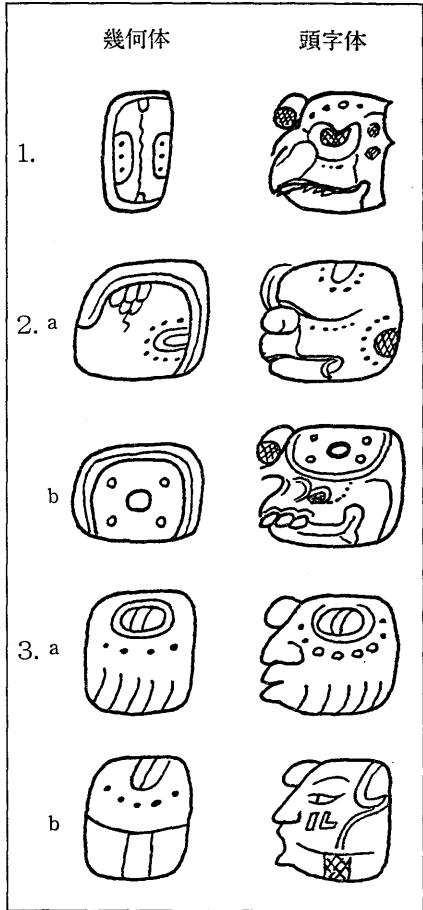


図15 幾何体と頭字体

から計算して同定できるものであるが、どこかに識別できる特徴を持っている。

文字の書き方

頭字体の向きは左を向いている。それゆえ、左から右に読まれる。右を向いたものは例が少ないが、あることはある。当然のことながら、それらは右から左に逆に読まれる。上を向いたものやひっくり返ったものもあるが、それは違った意味を表わす別の文字として機能している。字体の左に接字がついている場合、接している部分を見ると、接字のほうのくっついている部分は主字に侵食されて描かれていない場合が多い。それに対して主字は完全に描かれている。これを見ると、主字を先に書かないと、うまく書けないことがわかる。ということは、左から右に順に文字を書くことができないうけである。主字をさきに書かないことには、接字をうまくそれにくっつけて書くことがむずかしい。もちろん、左から順に書いた例もあるし、書けないことはないであろうが、実際に書いてみると、やはり左から接字を書いて次に主字を書くより、主字をさきに書かないと、うまく書けないのである。

では主字はどこから書きはじめたのであろうか。碑文の場合、文字は彫られたものであり、どこから書いたのか不明である。土器や絵文書の場合は書いたものであるから、どこから書いたかわかりそうなものであるが、なかなかうまく書いてあり、どこから書いたのかわかる例は少ない。外枠から書いたことは間違いないが、では外枠はどこから書きはじめたのだらう。よ

くみると、右上あたりから左に書いていったように思われる。実際に書いてみても、それが一番書きやすいので、たぶんそうしたと思われる。しかし左上から左下を通り右下に行き、半分を書き、左上から右上を通り右下に二筆で書いた例を『マドリッド絵文書』にみる事ができる。案外書き順には定まった規則はなかったのかもしれない。

接字と主字が結びあつて、これが一つの文字ますに納まつて、一つのまとまりのある単位を構成している。頭字体と幾何体は自由に交替するが、接字と主字はそうではない。これは意味や文法と関係している場合が多いからと思われる。しかし意味をかえず、接字が主字のなかにはいたり、一つでいいものを二つ重ねて書いたり、書き方の違いはいろいろある。(図16)

1—aは、三つの文字素から成り立っている。1—bは、1—aにみられる左の接字が額のところに取り込まれた文字であるが、1—aのように半分ではなく、全部書かれている。1—cは、主字が幾何体にかわつたものである。下に生起している下接字は、向きが異なり、どちらむぎでもいいことがわかる。これらの文字は、いずれも前の日にある日数を足して、次の日を導くときに用いる文字である。

2—aは四つの文字素から成り立っている。左の文字素の黒を表わす格子状の要素が、二番目の文字では上に、三番目の文字では主字のなかにはいつている。これは三六五日曆という曆のチェン月を表わす文字である。曆の文字には、2—aの文字の下にみられる三つの丸がつくことが多いが、つかなくてもいい。それゆえ飾りの要素とみることができが、曆の文字であ

第八章 曆と文字

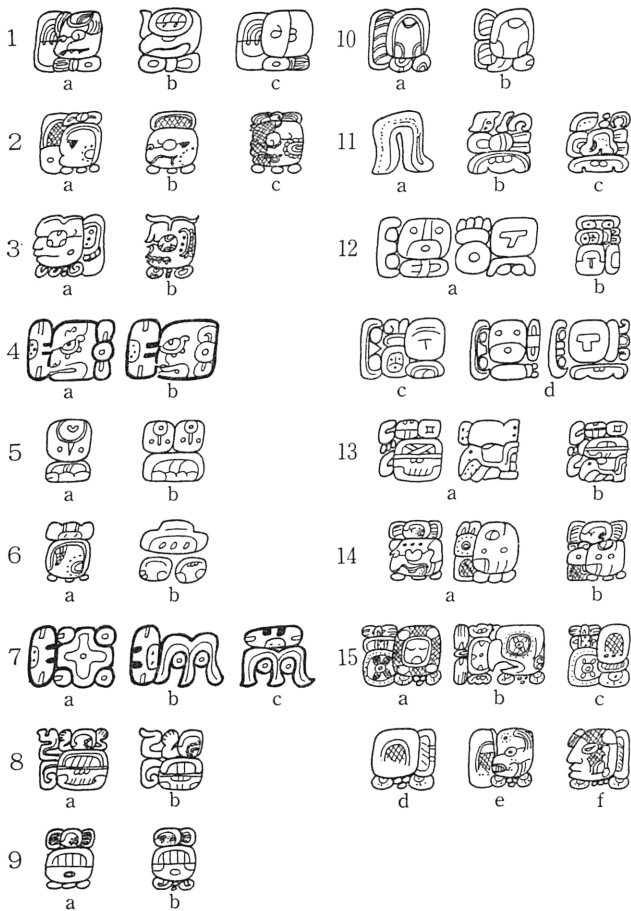


図16 文字の表記の違い

ることを示す文字素ということも可能である。

3ならびに4のaとbをくらべると、aの右にみられる右接字が、bでは主字のなかにはいつていることがわかる。2の例と同じように、接中字化される例であるが、2のように弁別要素だけが接中字化されるのではなく、接字全体がそのまま接中字化されている。

5、6、7の例は主字を二つ並べたり、半分にしている例で、8、9、10は接字の一部を省いたり、二つ重ねたりしている例である。

11から14は、接字のなかに主字を取り込んだり、二つの主字が、融合した例である。11は、夜を支配する九王を表わす文字、12は死を表わす文字である。13はボンバックのカン・モア
ン王である。

15はパレンケの大王パカルを表わす文字である。c、d、e、fはパカルを表わす音節文字を、幾何体で書いたり、頭字体で書いて変化させたものである。同じ文字を繰り返して使うことはマヤ人の美学に反したようで、テキストには同じ文字が繰り返して生起することはまれである。我々が文章を書くときにも、注意事項として同じ字句を繰り返すなどいうのがあるが、修辭的にはいいのかもしれないけれど、解読の場合には、かえって問題をむずかしくする原因の一つとなっている。

絵文書の読み方

実際のテキストをみてみよう。まず絵文書である。例は『マドリッド絵文書』の一〇三ページである。上段は二つの文があり、中段には三つの文がある。それぞれ前に点と棒による数字や二六〇日曆の文字があるし、それぞれに絵が添えられているので、それらが独立した単位になることがわかるであろう。読み順は例のごとく、左・右と読み、下にうつる読み順である。

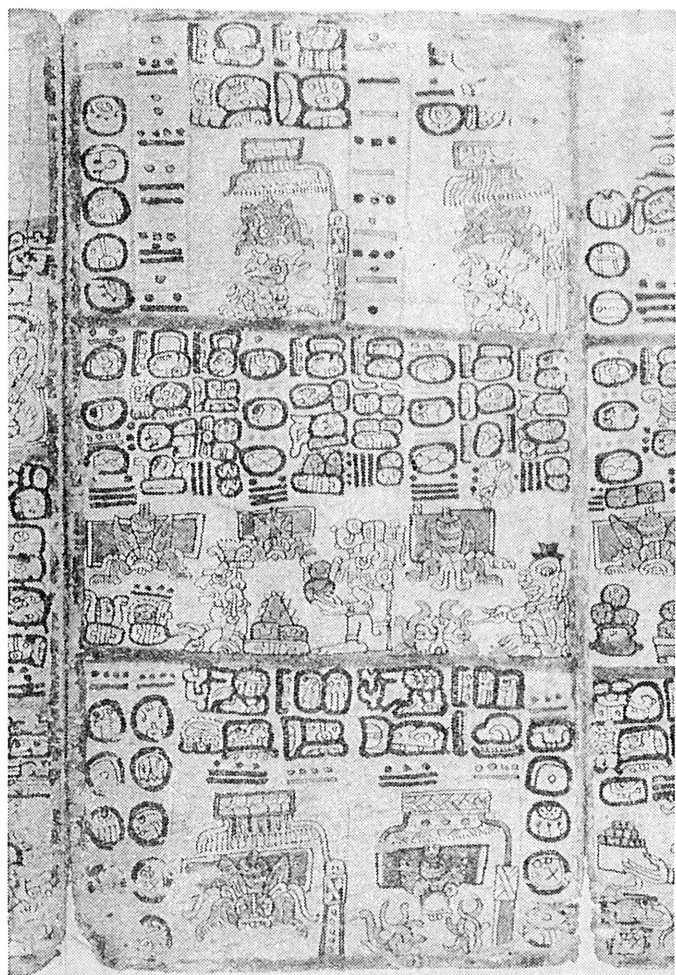
絵には蜜蜂がある。これがどこかに文字となって表われているはずである。各文を比較すると、どうやら二番目の文字が蜜蜂を表わしているようだ。この文字の主字は二六〇日曆のカーバン (Caban) と同じ文字である。ユカテク・マヤ語のカップ (Cah) と同じ語には、「大地」という意味とともに、「蜜蜂、蜂蜜」という意味があることから裏付けられる。ただし中段の一番左のテキストの二番目の文字にはカップがない。構造からみて、ここにはカップを主字とする文字がなくてはならない。しかしこれは最初の文字と同じであり、同じ文字が二つ続くことはまずないので、きっと書記者がまちがえたに違いない。大体マヤのテキストにはまちがいが少ないのであるが、『マドリッド絵文書』には非常に書きまちが多い。それに文字もくずれている。これはもうすでに退廃期である時代の作だからであろう。

ここで考えておきたいのは、一度書かれた文字には靈力が宿るとみる信仰である。この例はほかの世界にもある。碑文ではそうはいかないが、絵文書では、まちがえればそのうえに白を塗り直し、書き替えることが可能である。まちがいのままにしておいたのは、まちがいを直す

ことができなかつたためではなからうか。まさかまちがいに気づかなかつたはずはない。

三番目の文字はそれぞれ中段に登場している神を表わす文字である。中段の一番左のテキストと同じ文字が上段左のテキストの三番目にある。これはイツアムナとよばれている神を表わす文字である。ところがこの文字テキストの下にある絵にはイツアムナは登場せず、イグアナのような動物がいるだけである。おまけにこの動物に相当する文字はない。この例から、文字テキストと絵が対応するとは限らないことがわからう。

通常マヤのテキストの最初には動詞がくる。これはマヤの言語の特徴と合致している。中段のそれぞれのテキストの最初の文字をみると、それぞれの要素はランダのアルファベットとほぼ同じ文字である。そこでそれにランダが記している音価を当てはめると、*u-pa-eh*となる。さてここまでくると、今度はマヤ諸言語の辞書をめぐる番である。マヤ諸語は三〇余りの言語から成り立つのであるが、絵文書はユカテク・マヤ語で読むと一番理解できる。そこでユカテク・マヤ語の辞書をめくると、バックパク「pak」には多くの意味があるが、蜜蜂に関して、「養蜂する」とか「蜜をつくる」といった意味があり、場面と一致する。上段の最初の文字のほうは、*u-pa-eh*となる。pakには「所有する、殖やす」といった意味があるが、何とかこれも場面と関係づけることができる。



写16 「マドリッド絵文書」(103ページ) Codex Tro-Cortesianus(1967)、
Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz. より

碑文を読んでみよう

こうして場面を手掛かりに、文字の理解が進んでいる。ところがテキストには必ず絵がつくわけではない。そうしたテキストはその他のテキストと比較しないとなかなか理解できない。比較できるものがないと、まずそのテキストは理解不能である。そこで今度は、絵はないものの、比較できるテキストがあったため、何とか理解できるようになったテキストを分析することにしよう。選んだテキストはパレンケの『96文字の碑文』と呼ばれているものである。頭字体が多く、一見しただけでは歯がたちそうにない。だから例に選んだのであるが、かなり複雑にもかかわらず、比較できるテキストがあったお蔭で、現在ではその内容がほとんど理解できる。美しさのうえで最上の部類に入るテキストでもある。

まず最初にテキスト理解の骨組みとなる日付を読みとっていこう。

後期になると、長期暦を記さず、簡便に日付を記す碑文が多くなるのであるが、このパレンケの碑文もそうで、いきなり二六〇日暦と三六五日暦で、一二アハウ八ケフと記している。その次にコウモリが逆さになった文字があり、一一カトゥンの文字が続いている。これは一一カトゥンが完了した、すなわち九・一一・〇・〇・〇であることを簡便に記した文字群である。コウモリが逆さになった文字が一一カトゥンという期間の完了を表わすのは、どうもマヤ人のしゃれ心を表わしているようである。期間の完了というのは、その期間の役目が終わり、休みにつくということである。コウモリは逆さになって休むところから、コウモリの頭を逆さにす

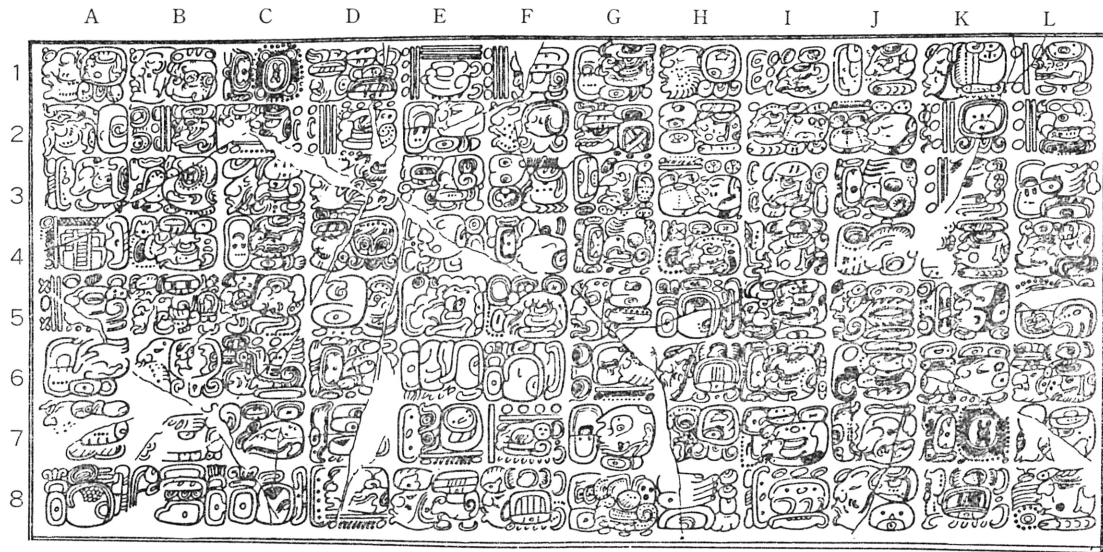


図17 パレンケの「96文字碑文」

ることで、休みを表わしているようだからである。

一二アハウ八ケフのこの節の主人公は、B3にあるパカル王である。その次のA4にはピラミッドをかたどった文字があり、B4ではパレンケの紋章文字が生起して、この節は終わる。ピラミッドをかたどった文字の正確な意味は不明であるが、パレンケを隆盛に導き、ピラミッドを建てた王がパカルであるので、ピラミッドの建設者といった意味が推定されている。

パレンケの紋章文字は、このほかC7、F5、H4、I7にも生起している。紋章文字のまえには人を表わす文字が生起し、日付のあとには動詞がくることをたよりに、ほぼこの碑文は解明できるのであるが、A3の文字の意味は不明である。

一二アハウ八ケフから二・一・一一たつた日が九チュエン九マックであることが、A5からA7にかけて記されている。一と一一は点と棒で書かれているが、その他の数は頭字体でかかっている。これらはわかりにくいのが、それぞれ識別できる特徴を持っている。たとえば九は顎ひげをもっており、E8とF8に連続してみられる二は、頭のうえに握った手がのっている。少しぐらいわからないものがあっても、前後をつなぐ数や二六〇日暦や三六五日暦の一部がわかれば、それぞれきちんとした体系の暦が組み合わさっているので、計算から補うことができる。こうして読み取ったのが次頁の表11である。

二六〇日暦、三六五日暦、前後をつなぐ数、期間の終わりを表わす文字等の暦に関する文字を数えると、九六文字ます中三八もある。約四〇%である。残りがこの碑文の主内容を伝

第八章 曆と文字

(9.11. 0. 0. 0)	12アハウ	8ケフ	A1-B1	(652年10月12日)
+	2. 1.11		A5-B5	
(9.11. 2. 1.11)	9チュエン	9マック	B6-A7	(654年11月 2 日)
+	2.18. 4.17		D2-D3	
(9.13.10. 6. 8)	5ラマツト	6シェル	D4-C5	(702年 6 月 1 日)
+	19.15.14		E1-F1	
(9.14.10. 4. 2)	9イック	5カヤップ	F2-E3	(722年 1 月 1 日)
+	2. 2.14. 5		F7-F8	
(9.16.13. 0. 7)	9マニック	15ウォ	H1-G2	(764年 3 月 6 日)
+	1. 0. 0. 0		H6	
(9.17.13. 0. 7)	7マニック	0パシュ	H7-G8	(783年11月22日)
-	7		L1	
(9.17.13. 0. 0)	13アハウ	13ムアン	K2-L2	(783年11月15日)

表11 パレンケ「96文字碑文」にみられる日付

えていると考えてよい。

五ラマツト六シェルではじまる節の動詞はD5で、それは即位を表わす文字である。そしてC6aはその修飾文字である。即位を表わす文字、その修飾文字はF5、H2にもみられる。

接字は月の文字といわれる文字素で、この場合「くした」という意味の動詞の接尾辞の役目を果たしている。D5にみられる文字素のなかには兎と思われる動物が描かれている。神とみられる女性が実際に兎を腕に抱いている図もある。我々と同様、マヤ人も月に兎が住んでいると考えていたので、これもマヤ人の文字遊びのようである。D5では月の文字は半分しか書かれていないが、F3、H2では全部書かれて主字の下についている。

即位の文字の次にはそれぞれ即位した王が記されている。D6はカンシュルとあだ名がつい

ている王で、その一つ前のC6bは、その王によくつく文字である。その次のC7の文字は、さきほどふれたパレンケの紋章文字である。F4はその次の王、チャークで、G4はクック王である。王には称号が前後につき、最後にパレンケの紋章文字が生起して、句を形成している。七マニック一五ウオの節は、上の表からわかるように、即位から一カトゥンたった日である。即位後一カトゥンの記念はH8からJ1にみられ、そのあとにクック王を表わす句が生起している。そのあとには、クック王の父であるチャーク王と母であるカアフ（またはアク）が生起し、この長い文は終わる。

このテキストをまとめると、一一カトゥンのパカル王の御代からはじまり、カンシユル王、チャーク王の即位を記した後、この碑文の主人公であるクック王の即位、そして即位後一カトゥンたった記念日に、チャーク王が父で、カアフが母であることを記し、最後にそれより七日前の区切りのいい日九・一七・二三・〇〇の日を記し、ふたたびパカル王との結びつきを述べて碑文を締めくくっているのである。おおよその意味はこのようにわかるのであるが、いざ個々の文字の意味、読みはどうかとなると、まだ理解できない文字がほとんどである。これがマヤ文字解読の現状である。

文字の読み

解読というのは、意味がわかって、読めなければならぬ。すでに意味がわかっているもの

はたくさんある。たとえば、誕生、即位、死、捕まえる、舌に穴を開け紐をとおす儀式、王の名前、称号、都市を表わすとみられる紋章文字、などである。それらのうちのいくつかは読むことも可能であるが、ほとんどはまだ読み方がわからない。だから、どのように文字を読むかということが、現在一番追究されている。これまで触れた王の名は、パカルを除いてすべてあだ名にすぎないのである。

文字の読み方は、十六世紀にスペイン人神父のランダが残した、いわゆるランダのアルファベットと曆の文字の読みが基礎になっている。文字の意味や読みの推定には、文字が生起する場面が役に立つ。特にリントルや絵文書には、ちょうどマンガのように絵があつて文字があることから、文字の意味や読みが推定しやすいのである。もっとも、まったく絵から推定できない文字もたくさんある。

マヤ文字の音価を探る方法には、三つの方法があるように思われる。一つは文字素の交替を利用したものである。交替には、類似の意味をもつものの交替（借義）と、類似の音をもつものの交替（借音）が考えられるが、表語文字の表音文字による書き換えもある。音をもとにした交替では、音価のわかっている文字素と交替する文字素があれば、それは同じ音価をもっているはずで、今度はそれと交替する文字素や、それを含む文字を見いだせれば、芋づる式に音価が決定できる。音価の確定の基礎となるのは、ランダが残したアルファベットと曆の文字とその読み方である。マヤ語の音声構造をもとに、マヤ文字の音節表というものが作られている

が、それはランダの残した文字を基礎に見いだされてきたものである。音節表には、マヤ語の音節に対応する文字素がまだ見つからず、空いているところがたくさんあるし、修正の余地もたくさんあるが、ともかくこれを適用して、意味が通じれば、解読できたことになる。

二つ目は、マヤ諸語の構造との比較から、文字の読みを捕らえようとする方法である。特に文法的な接辞と、接字の比較研究で、音価を当てはめようとする方法である。たとえばトンブソンの文字カタログのT130の文字素は、*— aam*または*— wa*とされているが、文字の生起形とマヤ諸語の文法構造の比較から、推定された音価である。それで得られた音価をもつ文字素が、他の文脈に生起して、その読み方で意味が通じれば、解読できたことになる。

三番目は音声補助符という考え方に基づく。たとえば、*kin*という文字素によくつく文字素T116は、*kin*の最後の*n*を表わすためにつけられたものとみる見方である。すなわち、*kin* *— ne* \vee *kin*というわけである。表語文字の最後の音を確定する文字素とみて、最後の音節と同じ音をもつとみる見方である。

これら三つの方法は、排他的なものではなく、互いに関係している。音価の推定は、いろいろな方法でなされるが、推定された音価は、まったく異なる文脈に生起したものがなければ、確かなものにはならない。

メソアメリカのなかのマヤ

マヤ文明が栄えたメソアメリカには、アステカの文字やサポテカの文字など、いろいろな文字系があった。しかしマヤ文字ほど進んだ体系には発達しなかった。マヤ文字がメソアメリカのその他の地域に採用されてもよいようなものであるが、そうならなかったのはなぜか。それはメソアメリカの歴史を考えるうえで、大きな問題の一つである。

マヤ社会とそれぞれの異なる文化をもった社会との交流は、古代から絶えることはなかった。古典期時代もつとも大きな影響をマヤ社会に与えたのは、メキシコ高原の巨大都市テオティワカンである。四、五世紀に、テオティワカンとマヤの中心であるティカルとの交流を物語る遺物がティカルで出土している。文字をもつ社会は一般に高度であり、文字のある社会から文字のない社会に影響が伝わるというのが普通であるが、この場合は逆で、その当時テオティワカンには、マヤ文字のように発達した文字はなかった。マヤ文字は、あまりにマヤ語に根ざした体系であったため、他の言語を用いる人々には使いこなすことができなかつたのであろうか。もしそうなら、マヤ語とマヤ文字を考える時に、それは大切な視点となるにちがいない。